

はじめに

ここに、教職課程の研究誌「学び舎 教職課程研究」の第二冊目を送ります。

今年度は教育に関して本当にいろいろな事柄がありました。

何よりも重要な出来事は、戦後60年の間、私たちの生きる指針であった「教育基本法」の改正であった。

「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」とその前文に明記されたことばは、私たちの祖先が作り上げてきた尊い歴史の総決算とも言えるものであった。そのことばは現在はない。

さらに未履修問題、続いて起きた「いじめ」問題とそれに伴っておきた悲しい「自死」。教育という仕事は子どもたちの未来を豊かにするためのものではないか。それなのに学校のなかでその未来を閉じてしまうような原因がつくられてしまう、という無念さ。『『汚い』と言われるから、毎日体を三回洗いました』という、かつていじめにあったという女性の言葉に、教育者たる我々はどうかどう応えたものか…。

いま中教審は数々の教育養成のための提言をしつつある。さらに、教育再生会議もいくつかの教育改革について発言している。しかし私たちは忘れてはならない。「教育は教師である」ということを。

このような時期、本学文学部に新しく教育学科が誕生する。この新学科を立ち上げるにあたって、私たちは

- ・ 児童期の人間形成にもっとも深く関わる小学校教諭
- ・ 障害の程度や多様化に対応し、適切に指導する特別支援学校教諭
- ・ 学校教育の枠を越え、生涯学習の分野で活躍する指導者の育成と、

本学全体が目指す「違いを共に生きる」のスローガンの下に、文化的な背景の違い、障害の有無を理解し、多様な個性に対応しうるコミュニケーション能力や実践力をもつ人間性豊かな教員を養成していくことを誓いあった。

この冊子は、そのひとつ一つの成果を写し出す鏡でありたいと願っています。

愛知淑徳大学 教職・学芸員教育センター長
小栗 正彦